

有田・小田部50

—第236・237・239次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第一一二五集

—101—

2012

福岡市教育委員会

福岡市教育委員会

有田・小田部 50

- 第236・237・239次調査の報告 -



遺跡番号	調査番号
ART236	1031
ART237	1032
ART239	1039

2012

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから、大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が育まれ、今日に至っています。これらかけがえない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査をおこなって、往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成 22 年度に行いました、有田遺跡群第 236・237・239 次調査について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、ご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において様々なご協力をいただきました、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成 24 年 3 月 16 日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

—例　言—

- 本書は福岡市教育委員会が、平成 22 年度に実施した有田遺跡群第 236・237・239 次調査の報告である。
- 第 237 次調査は佐藤一郎、第 236・239 調査は藏富士寛が担当した。
- 本書の執筆は I～III 章を藏富士、IV 章を佐藤がそれぞれおこなっている。
- 本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。

目 次

I.	はじめに	1
II.	第236次調査	3
1.	はじめに	5
2.	調査の記録	6
3.	小結	10
III.	第239次調査	15
1.	はじめに	17
2.	調査の記録	18
3.	小結	24
IV.	第237次調査	33
1.	はじめに	35
2.	位置と環境	36
3.	調査の記録	36
4.	小結	37

挿 図 目 次

図1 調査地点(1/2,500)	1	図11 SB002出土遺物(1/3)	20
図2 周辺遺跡(1/25,000)	2	図12 SB002-003(1/60)	21
図3 有田第236-239次調査位置(1/400)	6	図13 SD005・(1/3・1/60・1/100)	23
図4 有田第236次(1/100)	7	図14 SK012(1/3・1/40)	24
図5 有田第236次造構配置(1/100)	7	図15 有田第189-239次SD(1/400)	24
図6 SB001(1/60)	8	図16 有田第236-239次SB(1/100)	25
図7 SB009(1/60)	10	図17 有田第189-236-239次SB 配置(1/400)	26
図8 SK014(1/40)	10	図18 有田遺跡第28-237次調査位置図(1/250)	36
図9 有田第239次(1/100)	18	図19 有田遺跡第237次西壁土層図· 調査遺構配置図(1/100)	37
図10 SB001(1/60)	19	図20 有田遺跡第237次調査 出土遺物実測図(1/3)	37

図 版 目 次

第236次

図版1 上 調査区東半全景(南から)	中 調査区東半全景(南から)	下 調査区西半全景(南から)	
図版2 1 柱穴001土層(西から)	2 柱穴001穴完掘(西から)	3 柱穴002土層(西から)	4 柱穴002穴完掘(西から)
5 柱穴003上層(東から)	6 柱穴003完掘(東から)	7 柱穴004上層(東から)	8 柱穴004完掘(東から)
図版3 1 柱穴005土層(東から)	2 柱穴005完掘(東から)	3 柱穴006土層(東から)	4 柱穴006完掘(東から)
5 柱穴007土層(東から)	6 柱穴007完掘(東から)	7 柱穴008土層(東から)	8 柱穴008完掘(東から)
図版4 1 SK014(南西から)	2 SK014上層(西から)	3 SB009(北東から)	
4 SD011(南東から)	5 扱掘区(東から)		

第239次

図版1 上 調査区1(南東から)	中 調査区1(南から)	下 調査区1(西から)
図版2 上 調査区2(南東から)	中 調査区2(東から)	下 調査区3(東から)
図版3 1 SD005(南東から)	2 SD005(北西から)	3 SD005(南東から)
4 SD005(北西から)	5 SD005土層(北西から)	6 SK012(北西から)
図版4 1 柱穴002土層(西から)	2 柱穴002完掘(西から)	3 柱穴003土層(西から)
4 柱穴003完掘(西から)	5 柱穴004上層(北から)	6 柱穴004完掘(北から)
図版5 1 柱穴005土層(南から)	2 柱穴005完掘(南から)	3 柱穴006土層(南から)
4 柱穴006完掘(南から)	5 柱穴007土層(南から)	6 柱穴007完掘(南から)
図版6 1 柱穴008上層(南から)	2 柱穴008完掘(南から)	3 柱穴009上層(南から)
4 柱穴009完掘(西から)	5 柱穴010完掘(北から)	6 柱穴010土層(北から)

第237次

図版 上 有田237次調査全景(東から)	下 有田237次調査上層(東から)
----------------------	-------------------

I. はじめに

福岡平野の西側に位置する早良平野は、中央に室見川が流れ、その堆積作用によって形成されたものである。早良平野では大小の河川が発達し、その結果様々な台地や微高地が各所に存在しており、その上には数多くの遺跡が営まれた。の中でも特に著名なもの一つとして、有田遺跡群を挙げることができる。有田遺跡群は西を室見川、東を金屑川に挟まれた標高 15 m ほどの台地上に存在する。早良平野における拠点集落の一つであり、古くは旧石器時代から近世に至るまで、連鎖と遺跡が営まれる。

今回報告を行う第 236・237・239 次調査は、有田遺跡群の中央やや南寄りに位置し、遺跡の存在する丘陵の最高所付近にある。遺跡の密度も濃く、周辺では各時代の様々な遺構が確認されているが、特に注目されるものは、古代（古墳時代後期～奈良時代）における大型建物、倉庫群および廻続施設からなる遺構の一群であろう。これらは那津官家や早良郡衙との関連も指摘されている。

第 236・239 次調査の北隣では、第 189 次調査がおこなわれている（荒牧編 2000）。第 189 次調査では、弥生時代前期の貯蔵穴や甕棺、中・近世の掘立柱建物、溝などが検出されているが、中でも特筆すべきは、早良郡衙と目される建物群の政府跡が確認されたことである。その形態は、四面に庇の付く 2 × 6 間の正殿の周間に、梁間 2 間の長舎を巡らせるもので、正殿の中心から折り返した場合、東西長舎の幅は 40.2 m に復元されている。ただ、この調査では区内に南北長舎の南端を確認することができず、南北幅の確定については今後の課題として残されていた。南側の隣地で行われる第 236・239 次調査は、第一の目的として、この南北幅の確定にあったといえる。

文献 荒牧宏行編 2000『有田・小田部 33』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 649 集 福岡市教育委員会

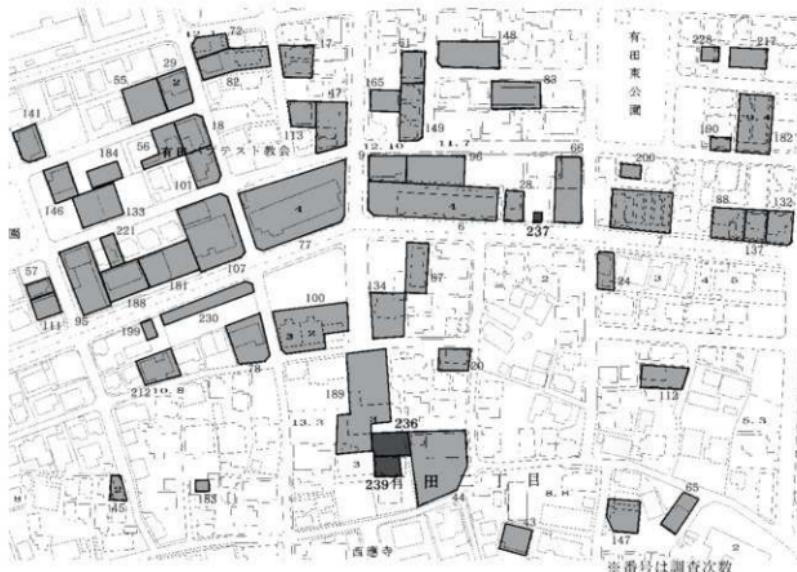


図2 圖2 圖2



第 236 次 調查

-例　言-

- 本書は福岡市教育委員会が、平成22年度に実施した有田遺跡群第236次調査の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- 本書における方位は座標北（日本測地系）であり、遺構についてはSB（掘立柱建物）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（柱穴）といった略号を使用している。
- 本章の執筆、図面の作成等は藏富士がおこなった。
- 本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

遺跡調査番号	1031	遺跡略号	ART236	
地番	早良区有田2丁目14番10・34・35	分布地図記号	82原	
開発面積	293.78m ²	調査対象面積	84.9m ²	
調査期間	2010.11.25～2010.12.28		調査面積	113.0m ²

II. 第236次調査

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

平成22年10月18日、早良区有田二丁目14番10・34・35における個人専用住宅建設に対し、埋蔵文化財の有無に対する照会がなされた。その場所は周知の埋蔵文化財包蔵地内（有田遺跡群）であることから、埋蔵文化財第1課では確認調査をおこない、現地表下20cmで、遺跡の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、工事に対する遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という対応が採られることとなった。発掘調査は埋蔵文化財第2課が実施し、平成22年11月25日に開始、同年12月28日に作業を終了した。調査にあたっては、関係各位に多大なご協力を賜った。記して感謝したい。

(2) 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査主体 福岡市教育委員会

平成22年度（調査）

事前審査	埋蔵文化財第1課	課長	濱石哲也
		事前審査係長	宮井善朗
		主任文化財主事	加藤良彦
		事前審査係	木下博文
總括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛
平成23年度（整理・報告）			
總括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛
整理作業	大石加代子 萩本恵子		

2. 調査の記録

(1) 調査の経過・遺跡の状況

調査地点は有田遺跡群の存在する台地のほぼ中央部、その最高所付近にあたり、郡庁建物等を確認した第189次調査の南側に隣接している(図2)。調査はまず調査対象範囲東半部の表土剥ぎを行い、表土直下のG L - 5~30cm(標高13m前後)の赤褐色ローム土上面を遺構面として発掘を開始した。東半部の調査終了は12月半ばで、終了後直ちに土砂を反転し西半部の調査を開始した。西半部の調査終了は12月後半。24日から測量や土器の洗浄、埋め戻し、および機材の撤収を行い、28日に全ての業務を終了している。

遺構の種類には、溝、土坑、柱穴があり、その大半は中世から近代にかけてのものである(図4・5)。今回報告を必要とする調査担当者が考えた遺構は図5に示した。いずれの遺構でも、出土遺物は少なく小片ばかりで、図化に耐えるものではない。今次調査で特筆すべきは調査区東側で確認した柱穴列であろう。今次調査では西側の柱穴列で4間、東側で2間を確認でき、これら柱穴は一辺0.8~1.0m程の平面方もしくは長方形を呈する。これら柱穴列は、第189次調査で明らかとなった郡庁建物の続きであり、それを構成する南北長舎(SB 02)の一部に相当する。以下では、この柱穴列を中心とし調査成果について述べる。

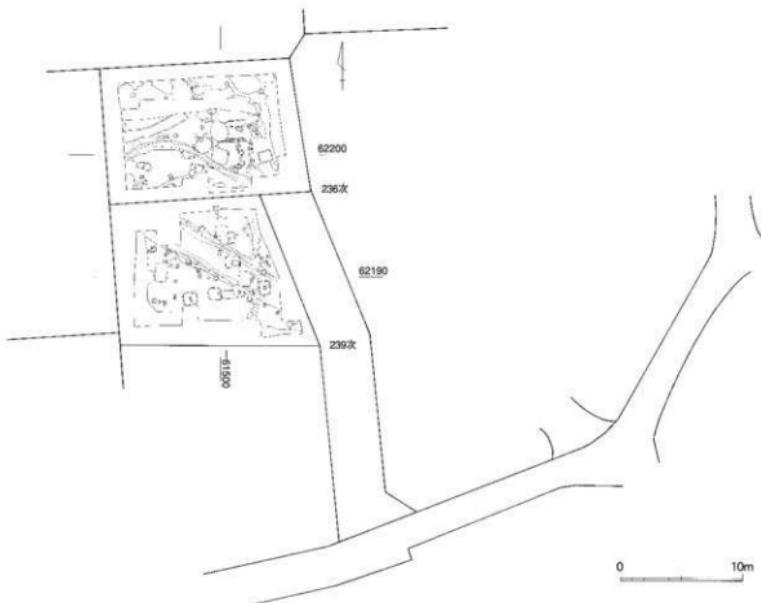


図3 有田第236・239次調査位置 (1/400)

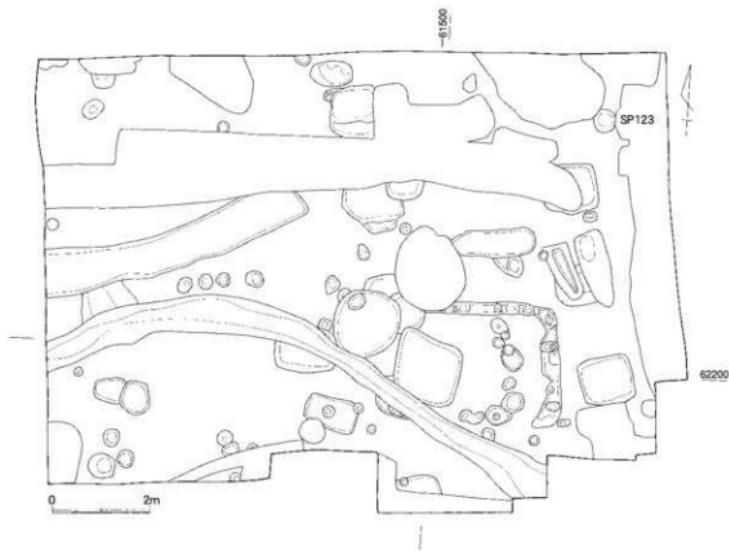


図4 有田第236次 (1/100)

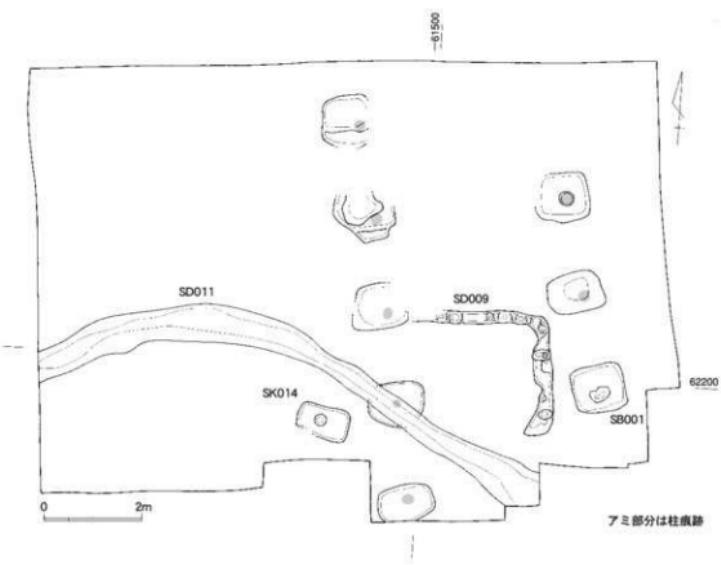


図5 有田第236次 遺構配置 (1/100)

(2) 遺構・遺物

1) 掘立柱建物 (SB)

SB001 (図 5・6)

調査区東半で確認できた柱穴列で、先にも述べたように、第189次調査で検出された郡庁の南北長舎 (SB02) の一部に相当する。主軸方位はN—11°—Eで、西側の柱穴列では5、東側では3の柱穴をそれぞれ確認した。柱穴 001 には柱穴 005、柱穴 002 には柱穴 006、柱穴 003 には柱穴 007 が、それぞれ対応している。柱穴 004 の対となる柱穴は擾乱によって失われており、柱穴 008 の対は確認できていない。

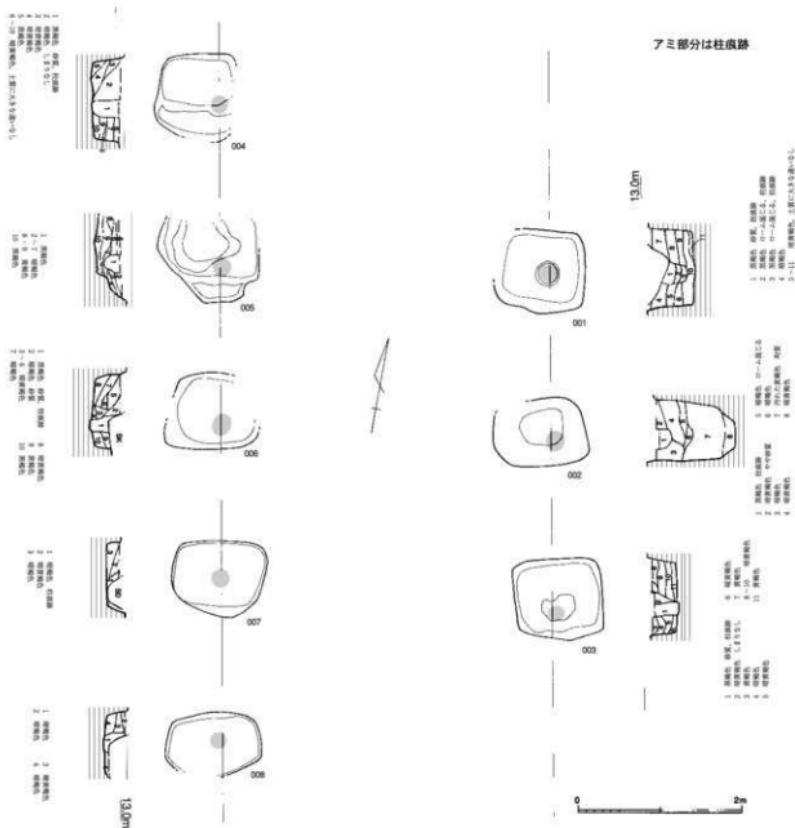


図 6 SB 001 (1/60)

柱穴は、平面形が東西方向にやや長い略方形を呈し、東西長1.1m、南北長0.8~1.0mをそれぞれ測る。その数値が示すとおり、柱穴における東西それぞれの辺は、ややばらつきをみせながらも、直線的に配列しているに対し、南北辺は対応する柱穴ごとのズレが目立つ。北辺を基準とすれば、30cm程、東側柱穴列は南側へずれていると言い換えることもできるだろう。柱穴掘方の底面は西側柱穴列で、深さ0.3~0.4m、標高12.7~12.8m、東側柱穴列で深さ0.3~1.1m、標高11.8~12.6mを測る。西側柱穴列の底面は、東側のそれに比して浅めであるといえる。そして西側柱穴列は底面の高さに差が少ないのでに対し、東側は違いか目立つ。特に柱穴002は極端に深いものとなっている。

柱痕跡は全ての柱穴で確認することができた。上面からみれば、各柱穴列の柱痕跡は直線的に配列していることが解る。また、土層を観察すれば、多くの柱痕跡は柱穴底面までとどいているようだ。柱穴002は深い分、柱痕跡は底面にまで遠く及ばないが、柱痕跡の深さは、他の東側柱穴列と大差ない。柱痕跡下の層（7層）は均一な土を堅く敷き詰めたものであり、柱穴が深い分、特別な造作が施されたのだろう。柱間は、西側柱穴列で北からそれぞれ、2.0m・1.95m・1.87m・1.98m、東側柱穴列で2.05m・2.12mを測る。西側柱穴列では柱間が2.1m（7尺）に足りない数値となっていることがわかる。いずれの柱痕跡も径20cm前後で、柱穴の規模から考えれば、柱自体はやや細め的印象を受ける。

出土遺物 ほとんどが混入品とみて良い弥生土器の小片である。時期を窺うことのできる遺物は無い。

2) 溝 (SD)

SD011 (図5)

調査区の南半に存在するものである。調査区の西側から調査区の南西側へ弧を描くように存在する。断面逆台形を呈し、幅0.3~0.9m、深さ0.2mを測る。出土遺物は小片ばかりで、その時期を窺うことはできない。ただ、溝の理土も褐色土で、それ程時期のさかのぼる遺構であるとも思えない。SB001の柱穴007を切っており、これよりは明らかに後出するものである。SDは後述する第239次調査においても、その続かが確認されている。

SD009 (図7)

調査区の南西側に存在する浅い溝で、平面は逆「L」字状を呈する。東側の一辺は2.5mを測り、そこから直角に折れ曲がった北側の一辺は2.7mまでが残る。SB001の柱穴006とは切り合い関係にあった可能性もあるが、前後関係を確認するに至っていない。溝の深さは10cmも満たず、幅も0.2~0.3m程である。ただ、SD009中には多くの小坑が確認できることは注意しなければならない。SD009は「溝」というより、柱列の「布掘」である可能性も考えたが、この小坑があまりにも浅くそして不規則であったため、ここでは「溝」として、記述をおこなっている。

この遺構の性格を考える上で参考になるのが、第189次調査のSB06である（荒牧編2000）。SB06は梁行2間、桁行3間の側柱建物で、梁行3.6m、桁行5.2mを測る。注目すべきは、建物の北辺と東辺では、柱筋に沿って、「断片的に溝が検出され、その基底には小穴が連続したような起伏がみられ」ることである。これは極めて今次調査のSD009の状況と類似しているといえる。担当者はSB06が壁立建物であった可能性を指摘しており、柱穴こそ確認していないが、このSD009は壁立柱建物の痕跡であったのかもしれない。

出土遺物 出土遺物は細片であり、時期を決めるには至っていない。ただSB06は中・近世の遺構として報告されており、今次調査の所見もそれを否定するものではない。

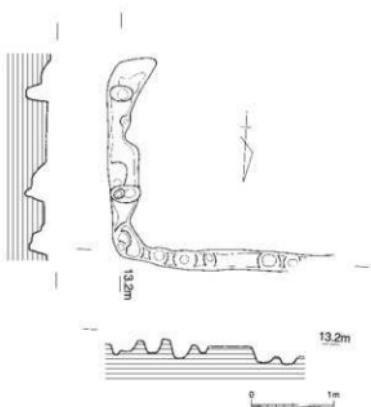


図7 SD 009 (1/60)



図8 SK 014 (1/40)

3) 土坑 (SK)

SK014 (図8)

調査区中央部の南端に存在する。 1.1×0.6 mの平面長方形を呈する。深さは20cm程で、その底面中央には円穴が穿たれている。円穴は径20cmで、その深さ20cmである。埋土は主に暗褐色ローム質土で、遺構の性格は不明。図8に示した断面形状、土層堆積状況をみても、柱穴ではないだろう。

出土遺物 無く、時期は不明である。

3. 小結

今次調査では第189次調査における都庁内の南北長舎(SB 02)の続きを確認することができた(SB001)。その状況をみる限り、建物は調査区外の南側へ延びていくものと予想される。第189次調査時における所見を加味すれば、南北長舎(SB 02)は桁行17間以上の建物となる。これら柱穴列からは土器の細片などがわずかに出土したのみで、詳細な時期の決め手に欠くと言わざるを得ない。

ところで、第189次調査の南北長舎(SB 02)の東側には、建物に並行して柱穴列(SA03)が存在している。これは他の建物一部でもなく、柱穴の配置にズレがあることから、SB02の庇ともいえない遺構(柵列)であると報告されている。この「柵列」の確認が当調査においても期待されたが、この柵列の存在が想定される調査区東端は攪乱がひどく、結局この柵列の続きを確認することはできなかった。ただ、位置的にはSP 123はその候補となりうるものであるが、確証は持てない。なお、更に南側の状況、その一端は、次章で述べる第239次調査において明らかにすることことができた。



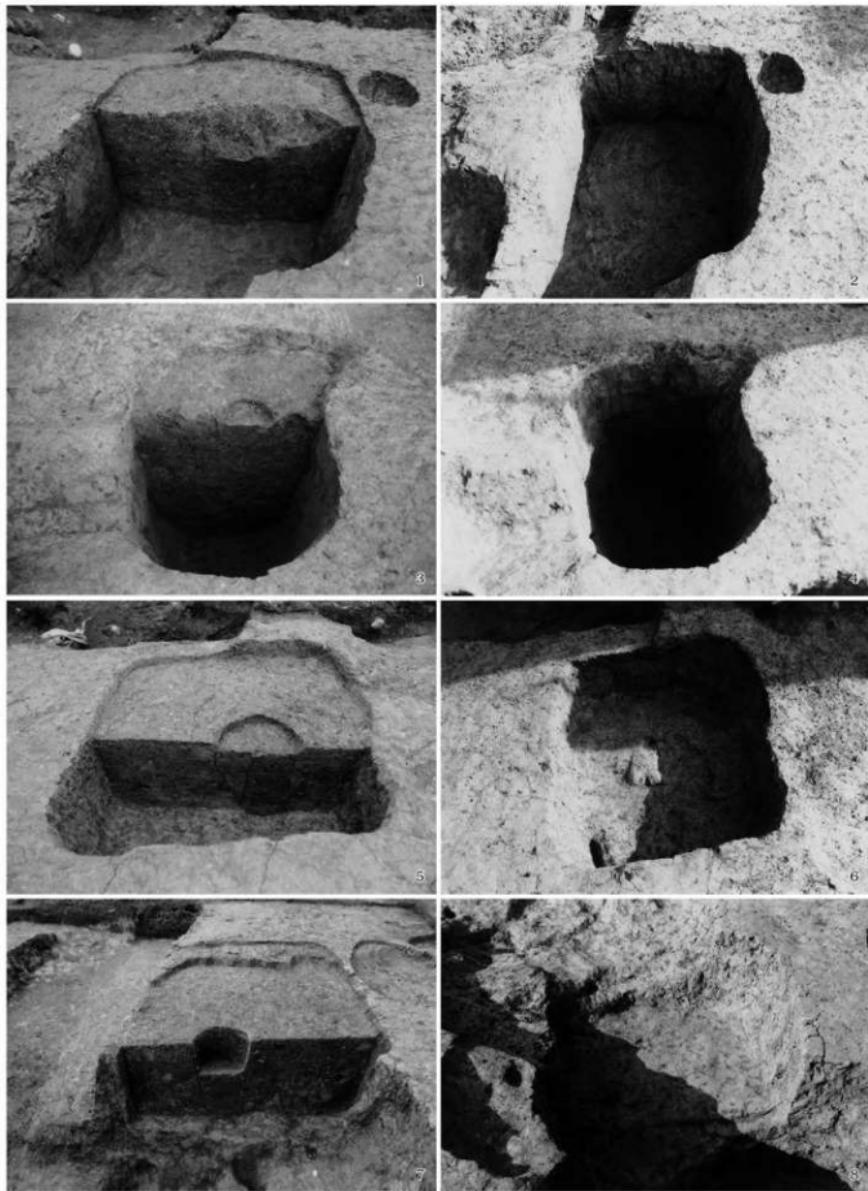
調査区東半全景1（南から）



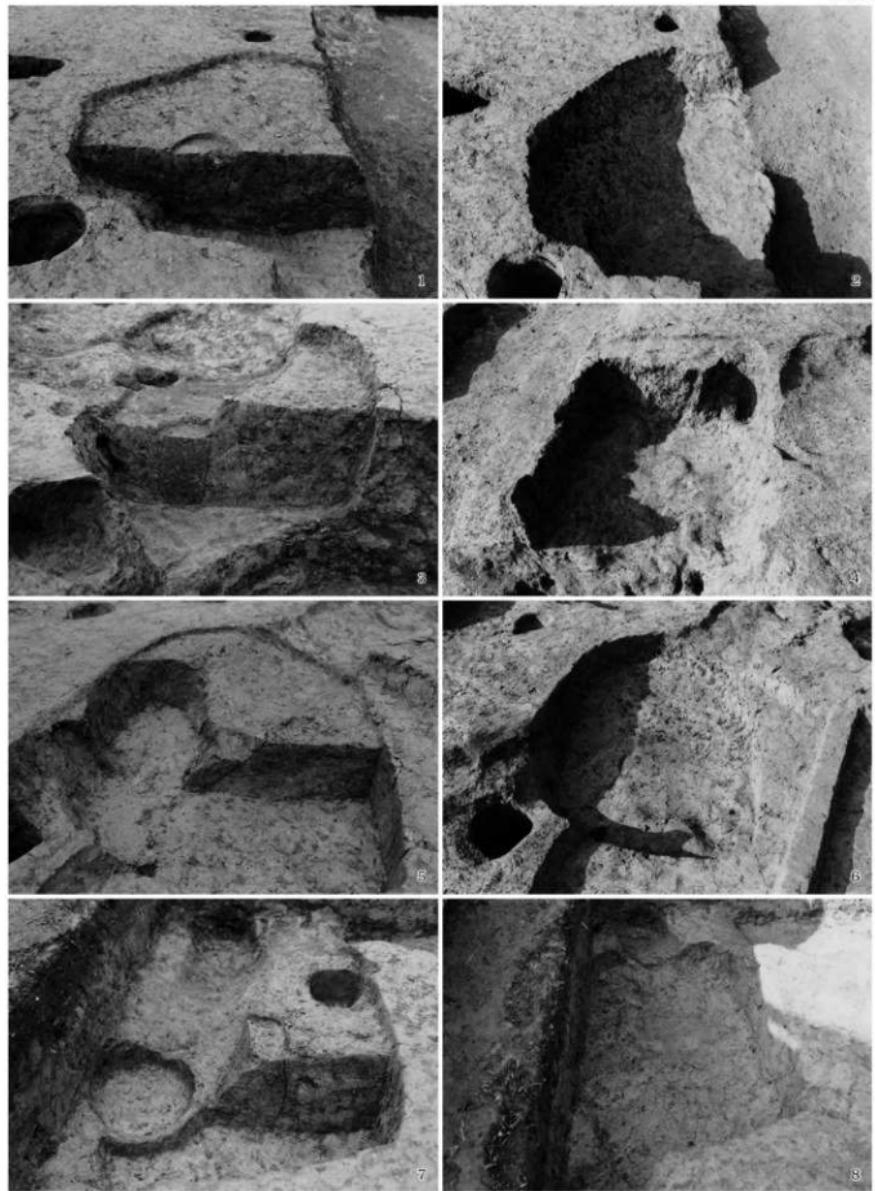
調査区東半全景2（南から）



調査区西半全景（南から）

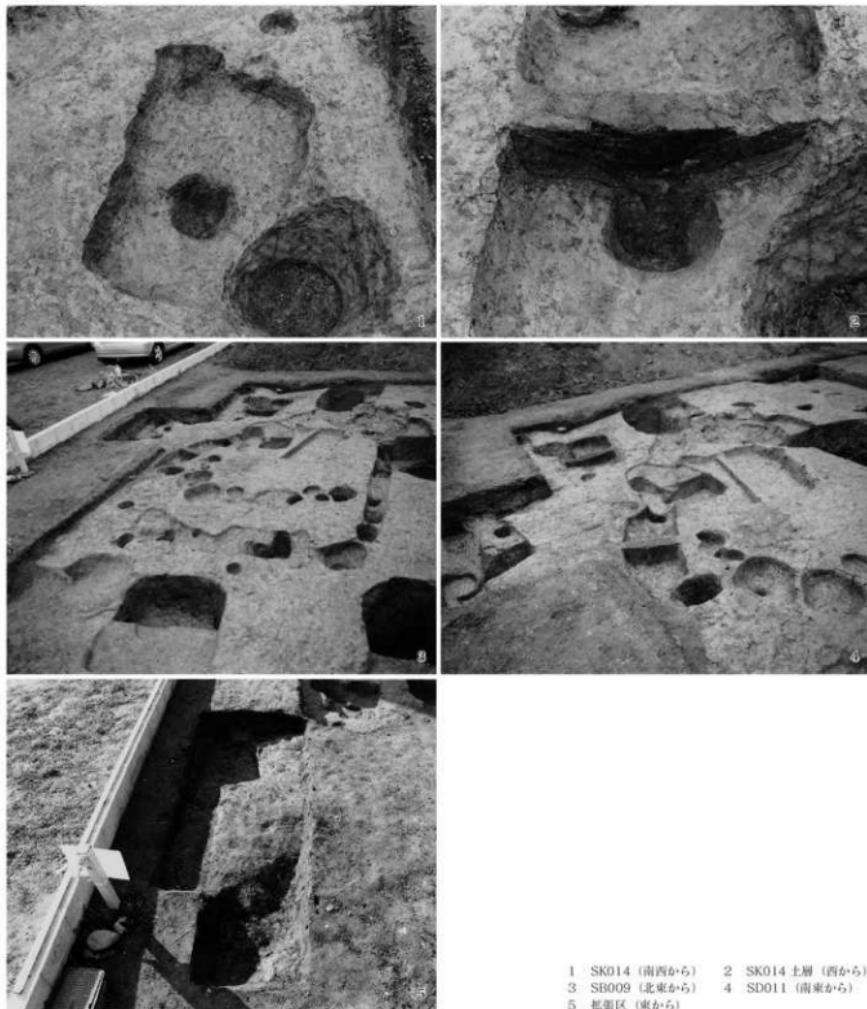


1 柱穴 001 土層（西から） 2 柱穴 001 完掘（西から）
3 柱穴 002 土層（西から） 4 柱穴 002 完掘（西から）
5 柱穴 003 土層（東から） 6 柱穴 003 完掘（東から）
7 柱穴 004 土層（東から） 8 柱穴 004 完掘（東から）



1 柱穴 005 土層 (東から) 2 柱穴 005 完掘 (東から)
3 柱穴 006 土層 (東から) 4 柱穴 006 完掘 (東から)
5 柱穴 007 土層 (東から) 6 柱穴 007 完掘 (東から)
7 柱穴 008 土層 (東から) 8 柱穴 008 完掘 (東から)

図版 4



1 SK014 (南西から) 2 SK014 土層 (西から)
3 SB009 (北東から) 4 SD011 (南東から)
5 抵張区 (東から)

第 239 次 調查

-例　言-

- 本書は福岡市教育委員会が、平成22年度に実施した有田遺跡群第239次調査の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- 本書における方位は座標北（日本測地系）であり、遺構についてはSB（掘立柱建物）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（柱穴）といった略号を使用している。
- 本章の執筆、図面の作成等は藏富士がおこなった。
- 本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

遺跡調査番号	1039	遺跡略号	ART239
地　　番	早良区有田2丁目14番36	分布地図記号	82原
開　発　面　積	170.35m ²	調査対象面積	58.24m ²
調　査　期　間	20110201～20110311		

III. 第239次調査

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

平成22年12月15日、株式会社未来工房より早良区有田二丁目14番36における個人専用住宅建設に対し、埋蔵文化財の有無に対する照会がなされた。その場所は周知の埋蔵文化財包蔵地内（有田遺跡群）であり、近隣でおこなわれた有田第236次調査では、現地表20cm程度で遺跡の存在が確認されている。両者協議の結果、工事に対する遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という対応が採られることになった。発掘調査は埋蔵文化財第2課が実施し、平成23年2月1日に開始、同年3月11日に作業を終了した。調査にあたっては、関係各位に多大なご協力を賜った。記して感謝したい。

(2) 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査主体 福岡市教育委員会

平成22年度（調査）

事前審査	埋蔵文化財第1課	課長	濱石哲也
		事前審査係長	宮井善朗
		主任文化財主事	加藤良彦
		事前審査係	木下博文
總括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛

平成23年度（整理・報告）

總括	埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
		調査第1係長	米倉秀紀
庶務	埋蔵文化財第1課	管理係	井上幸江 古賀とも子
担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	藏富士寛
整理作業	大石加代子 萩本恵子		

2. 調査の記録

(1) 調査の経過・遺跡の状況

調査地点は有田遺跡群の存在する台地のはば中央部、その最高所付近にあたり、先に述べた有田126次調査の南側に続く位置にある。郡庁建物等を確認した第189次調査の南東側にあたる。調査はまず調査対象範囲東半部の表土剥ぎを行い、表土直下のG L - 5~30cm(標高13m前後)の赤褐色ローム上を遺構面として調査を開始した。調査の対象地は狭く、西半部の調査に関しては排土処理のため、2回に分けて調査を実施しており、この調査では計2度の土砂反転をおこなっている。3月4・5日に機材の撤収および最終調査地点の埋め戻しを実施し、測量や土器の洗浄を行った後、11日に全ての業務を終了した。

溝、土坑、柱穴といった弥生時代・奈良時代を中心とする遺構を確認した。弥生時代の遺構には溝(S D 005)、貯藏窓(S K 012)がある。S D 005は幅約3mの大きなもので、調査区内で大きな割合を占めている。貯藏窓は1基のみを確認した。S K 012は調査区間に位置していること、S D 005に多くを切られていることから、全形を把握するには至っていない。

本次調査において特筆すべきは、やはり調査区東・南側で確認した柱穴列であろう。まず第189・236次調査で確認した郡庁を構成する南北長舎(S B 02)の南端を確認し、そして長舎の南側には東西方向に向く建物の存在を新たに確認できた。以下ではこれら遺構を中心に調査成果について述べる。



図9 有田第239次 (1/100)

(2) 遺構・遺物

1) 挖立柱建物 (SB)

SB001 (図 10)

調査区東半で確認できた柱穴列で、先にも述べたように、第 189・236 次調査で検出された郡庁の南北長舎の一部に相当する。桁行側の西側柱穴列を 2 間分、梁行側の柱穴を 1 間分それぞれ確認している。

桁行側の柱穴は、柱穴 001 ~ 003 が相当し、直線的に配列をみせる。001 は多くが攪乱によって失われており、全形が明らかなのは、柱穴 002・003 である。いずれも平面形が東西方向にやや長い略方形を呈し、東西長 1.2 m、南北長 1.0 m をそれぞれ測る。そしてこれら柱穴からは、柱痕跡を確認することができた。いずれの柱痕跡も径 20cm 前後で、柱穴の規模から考えれば、柱自体はやや細め的印象を受ける。土層を観察すれば、柱穴底面までとどいていることがわかる。柱穴 002・003 の柱間は 2.15 m を測る。柱穴掘方の底面は深さ 0.4 m、標高 12.8 m 前後である。

ところで、第 236・239 次調査いずれにおいても、SB 001 における柱穴の埋土は、地山である赤褐色ローム土が主で、土色も暗赤褐色を基調としていた。しかし柱穴 003 のみ埋土は黒褐色を呈していた。土色が SD 005 埋土と似ており柱穴の検出には苦労したが、これは柱穴 003 が SD 005 を切り込んでいたために生じたもので、柱穴掘削の際に生じた堆土、つまり SD 005 の埋土をそのまま柱穴の充填に使用したことを見ているのであろう。なお、同様の現象は同じく SD 005 を切り込んでいる、後述の SB 002 の柱穴 005・006 においても確認できた。

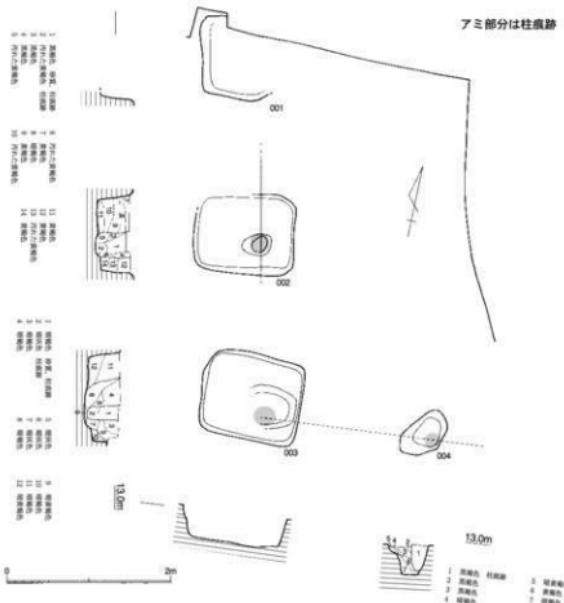


図 10 SB 001 (1/60)

今回の調査では梁行側の柱穴を1箇分確認した。これで、北長舎の南端を確認できたことになる。梁間の柱穴（柱穴004）は長さ0.7m、幅0.4mの梢円形を呈しているが、これは柱周辺の凹部のみを確認したためで、本来の柱穴の平面形態を示していない可能性が高い。しかし、そうであるにしても、削平の度合いが激しく、桁行側の柱穴より浅い、若干形態の異なるものであったのだろう。本調査のSB001に相当する、第189次調査において確認されたSB02（南北長舎）の梁間の柱穴（SP4）は、他の柱穴に比して「一回り小さく、浅い」と報告されている。また柱穴004からは、柱痕跡を確認することができた。この柱痕跡も他と同じく、径20cmにも満たない。柱穴掘方の底面は深さ0.5m、標高12.5m前後である。柱穴003・004の柱間は2.12mを測る。ところで、今回確認した状況では、桁行と梁行の柱筋の交わる角度は97°と直角になっておらず、柱穴004の位置はやや南側に寄っている。

出土遺物 ほとんどが混入品とみて良い弥生土器の小片である。時期を窺うことのできる遺物は無い。

SD002（図12）

調査区南側では、郡庁を構成する建物の柱穴と目される柱穴が6箇確認できた（柱穴005～010）。柱穴005～008は一続きに規則的に並ぶもので、同じ建物を構成する柱穴列として認識可能だろう。調査区南東側に位置するこの建物をSB002とする。仮にSB002を郡庁の南北長舎であるSB001と同程度の梁間の建物であると想定すれば、この柱穴列の南側に存在する柱穴009は、南側桁行の柱穴の一つであったといえるだろう。調査区の南端は擾乱を受けており、柱穴009以外の南側桁行の柱穴は確認することができなかつた。

ところで、SB002北側桁行（柱穴005～008）柱筋の延長上に柱穴010が存在する。柱穴010と西端の柱穴008との間は、柱穴005～008の柱間とちょうど倍の開きがあり、ここでは、柱穴010はSB002とは異なる建物の柱穴であるとみなすことにする。この建物をSB003としよう。

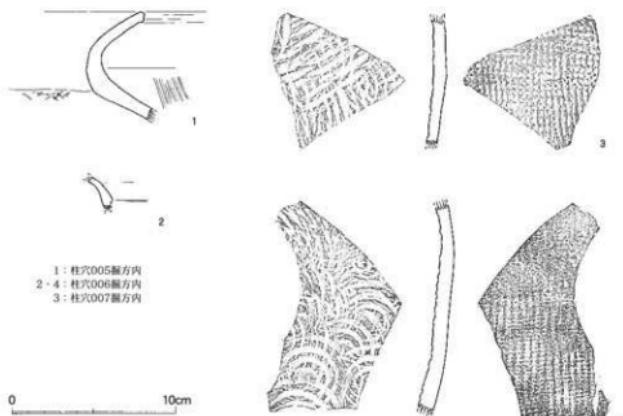


図11 SB002出土遺物（1/3）

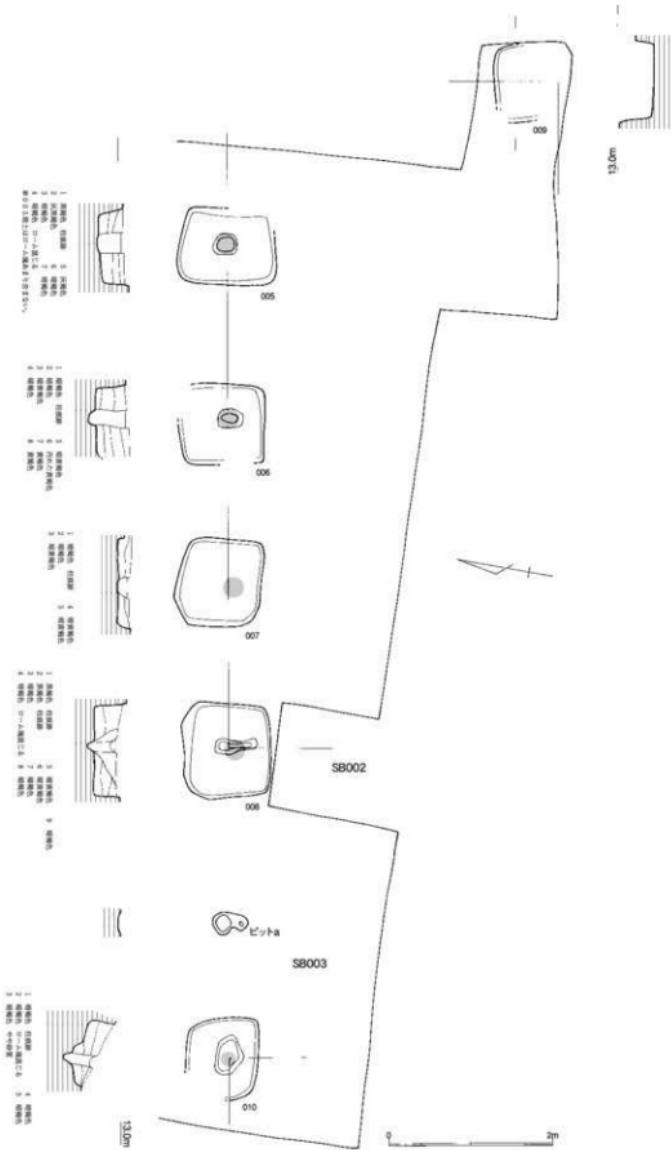


図 12 SB 002・003 (1/60)

ただ、ピット a の存在には注意しなければならない。ピット a は柱穴 005 ~ 008 から柱穴 010 へ続く筋上に存在するものであるが、深さは数 cm しかない。出土遺物は無く、埋土からはこれが間柱の痕跡となるのか否か、担当者には判断がつかなかった。ちなみに、ピット a と柱穴 008、010 との距離は、それぞれ 2.1 m、1.65 m と、両柱穴の中間ではなく、明らかに柱穴 010 側に寄っている。

北側桁行の各柱穴 (005 ~ 008)、そして南側桁行の柱穴 009 は、それぞれ対となる柱穴を確認できていない。また、柱穴 009 は SB001 (南北長舎) 東側桁行の柱筋の延長上に位置しており、これより東側には柱穴列のはびないだろう。とすれば、SB002 は梁行 2 間、桁行 4 間の建物であった可能性が指摘できる。主軸方位は N-101° - E で、S B 001 の主軸に直交する。北側桁行の柱穴は、SB001 の桁行柱穴と同じく、 1.2×1.0 m の略方形を基調とするものに変わりはない。しかし、南北方向に長いもの (005・006)、東西方向に長いもの (007・008) に 2 分することができる。南側柱穴 009 は半ば以上を搅乱によって失っているが、前者にあてはまる可能性が高い。建物半ばを境に柱穴の平面形状が変化していることは興味深い。柱穴掘方の底面は北側柱穴列で、深さ 0.2 ~ 0.4 m、標高 12.7 ~ 13.0 m、南側柱穴 009 で深さ 0.4 m、標高 12.6 m を測る。

柱痕跡は全ての北側桁行の柱穴で確認することができた。また、柱痕跡は柱穴底面までとどいている。柱間は、西からそれぞれ、2.0 m・2.1 m・2.15 m を測る。これまでと同じく、いずれの柱痕跡も径 20cm 前後で、柱穴の規模から考えれば、柱自体はやや細めである。南側柱穴 009 は搅乱により、柱痕跡はすでに失われていた。

出土遺物 (図 11) SB 001 とは対照的に、S B 002 の北側桁行の柱穴からは、多くの遺物、特に須恵器が出土している。2 は須恵器杯蓋片。6 世紀中頃のものである。柱穴 006 出土。1・3・4 は須恵器甕である。1 は口縁部片で、端部はほとんど肥厚しない。端面はわずかに凹む。外器面平行タタキ、内器面同心円タタキ。柱穴 005 出土。3・4 はいずれも甕の胴部片で、外器面は擬格子状の平行タタキ、内器面は同心円タタキで青海波状を呈している。3 は柱穴 007、4 は柱穴 006 出土。

SB003 (図 12)

調査区の南西側、S B 002 の西側に存在するもので、柱穴 1 (010) の存在を確認したに過ぎない。搅乱により大きく削られており、基底部を中心とした 1/2 程度が残る。先にも述べたように柱穴 010 は、S B 002 の北側桁行 (柱穴 005 ~ 008) の柱筋の延長上に位置しており、S B 003 は S B 002 と軸を同じくする建物であった可能性が高い。梁行も同程度のものであったのだろうか。柱穴 010 は平面 1.0×0.9 m の略方形を呈している。S B 001・002 の柱穴に比して小形に思えるが、これは上面を削り取られているためであり、本来はこれら柱穴と同程度であったのだろう。S B 002 の例で言えば、東西方向に長い部類に相当する。柱穴底面は平坦ではなく、やや西側へと傾斜する。底面までの深さは 0.4 ~ 0.5 m、標高 12.5 ~ 12.6 m を測る。柱痕跡が残り、これも幅 15cm と細めである。

出土遺物 土器の小片がわずかに出土したのみで、時期を窺うことのできる遺物は無い。

2) 溝 (SD)

SD005 (図 13)

調査区の中央を北西 - 南東方向に直線的に走る溝で、幅 2.8 m、深さ 0.7 m を測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦で、幅 1.5 m とかなりの幅広である。壁面は途中でわずかに段をなしており、土層断面をみても、いくつかの中斷を経て、溝が埋没していったことが分かる。SD 006 や S

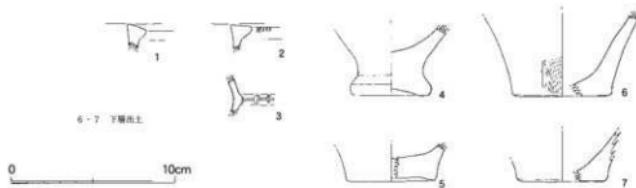
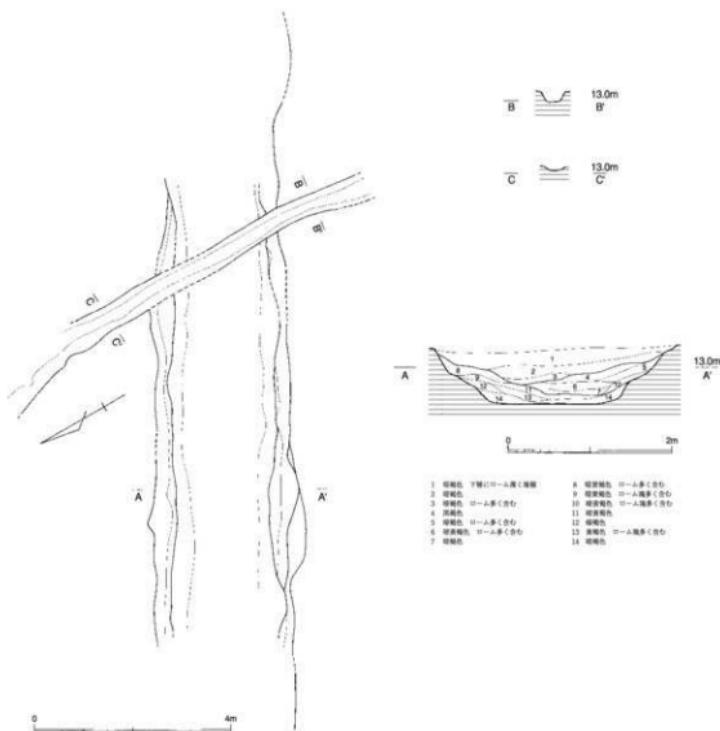


図 13 SD 005 (1/3・1/60・1/100)

B 002・003 に切られているが、SK 012 を切り込んでいる。この切り合いや出土遺物より、弥生時代前期末から中期初頭に位置づけることができる。

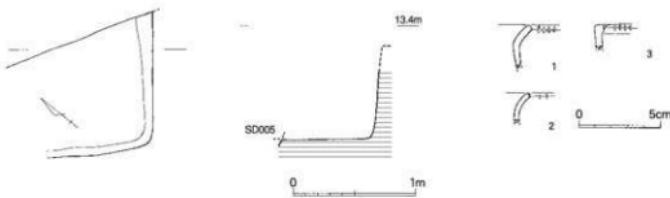


図 14 SK 012 (1/3・1/40)

3. 小結

以下では、第 236・239 次調査の成果と問題点について述べ、結びとしたい。

S D 005 について

S D 005 の続きは第 189 次調査においても確認されている。S D 399 がそれで、削平によりほとんど残っておらず、報告では時期不明とある。S D 005 は底面の広い、断面逆台形を呈する溝で、掘り方の半ばで段をなしており、堆積をみても途中の掘り返しを想定できる。

出土遺物は少ないが、おおむね弥生時代前期、特に末葉から中期初頭にかけてのものが多い。弥生時代前期の貯蔵穴 SK 012 を切り込んでいるため、これよりは明らかに後出する。このような幅広の逆台形を呈する溝は、近隣では有田第 54 次調査の S D 04 があり、これは弥生時代前期に位置づけられている（井澤編 1995）。ここでは、出土遺物よりこの溝の時期を前期末葉から中期初頭としておくが、この溝の掘削年代が更にさかのぼる可能性も考えておきたい。調査地点は、有田遺跡群における弥生時代初頭の環濠内側に位置しており、S D 005 とこの環濠との関係が問題となるだろう。

S B 001～003（郡府建物）について

今回の調査最大の成果は、郡府建物の南端を押さえることができたことであろう。第 189 次調査地点から続く、郡府建物南北長舎は、梁行 2 間、桁行 21 間で、桁行の長さは 42.6～43.0 m を測る。郡府南側では、S B 002・003 を確認できた。S B 002 は梁行 2 間、桁行 3 間を想定できようか。S B 002 の東側へと続く S B 003 は 2 間分の間があり、これらが「長舎」となるのかは不明である。S B 003 は残念ながら、柱穴 1 を確認したのみであり、門付近の構造については明らかにすることできなかった。



図 15 有田第 189・239 次 S D (1/400)

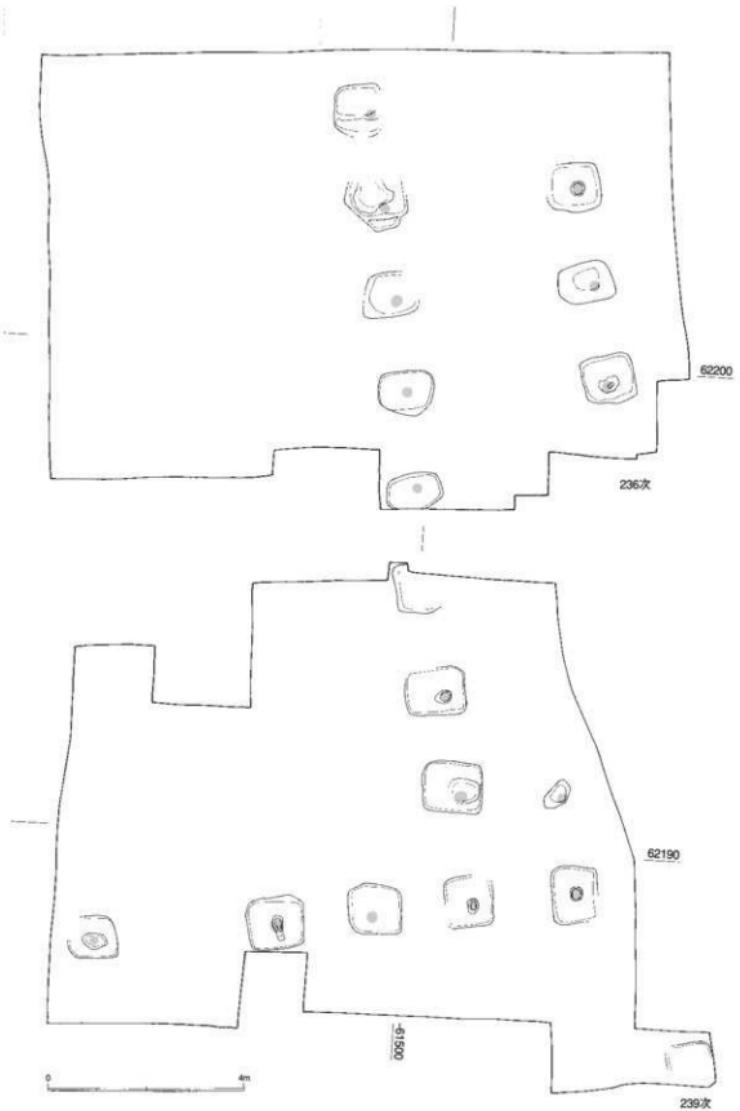


图 16 有田第 236·239 次 S B (1/100)

今回調査の各柱穴からの出土遺物は少なく、時期を判断する決め手に欠ける。第189次調査時には、九州編年VI期に相当する須恵器壺蓋が出土しており、調査報告書は郡庁建物の構築時期を7世紀後半以降に比定する。今回の調査ではSB002で数点の須恵器が出土しているが、いずれも壺の破片で、担当者にはその所属時期を特定することができない。いずれにしても、この建物がこの時期までにさかのほる根拠を見いだすことはできなかった。ところで、今回の調査でまとまった遺物が出土したのは、SB002である。破片も大きく、柱穴掘方内へ混入するに至った経緯は、建物の所属時期を考える上でも注目される。

文献 井澤洋一編 1995『有田・小田部』第22集 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第427集 福岡市教育委員会

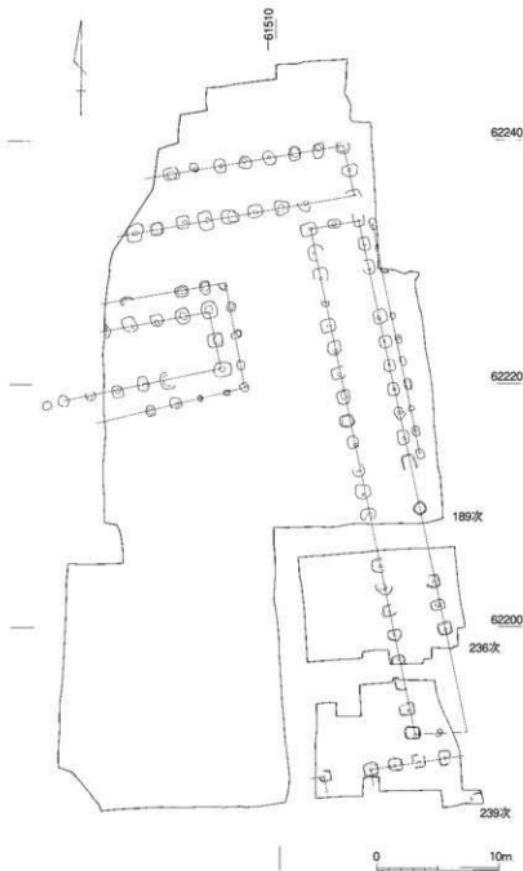


図 17 有田第189・236・239次SB配置 (1/400)



調査区1（南東から）



調査区1（南から）



調査区1（西から）

図版 2



調査区2（南東から）



調査区2（東から）



調査区3（東から）



1



2



3



4

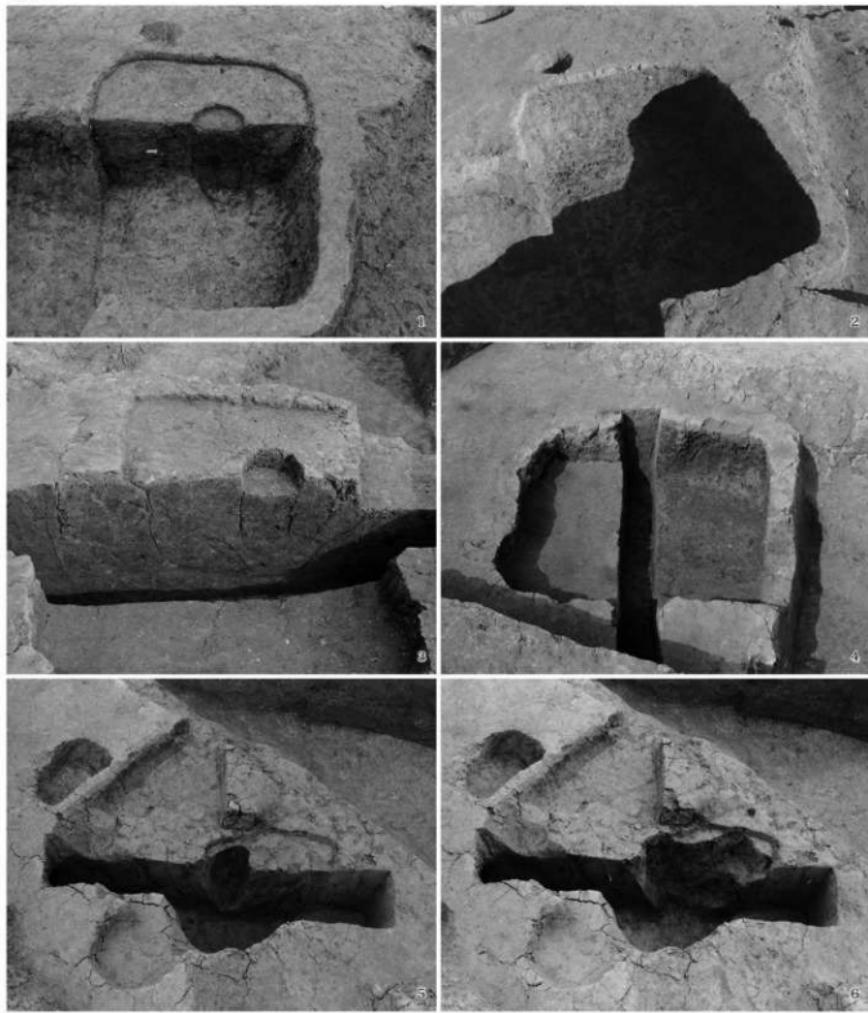


5

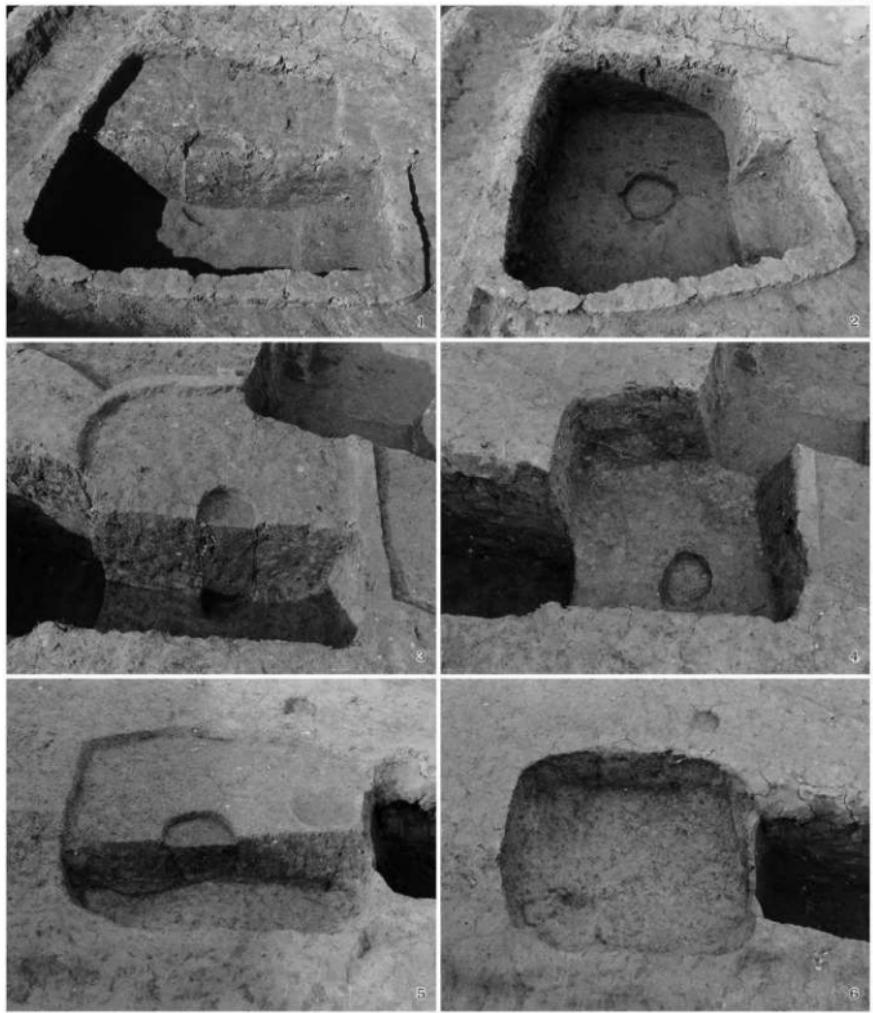


6

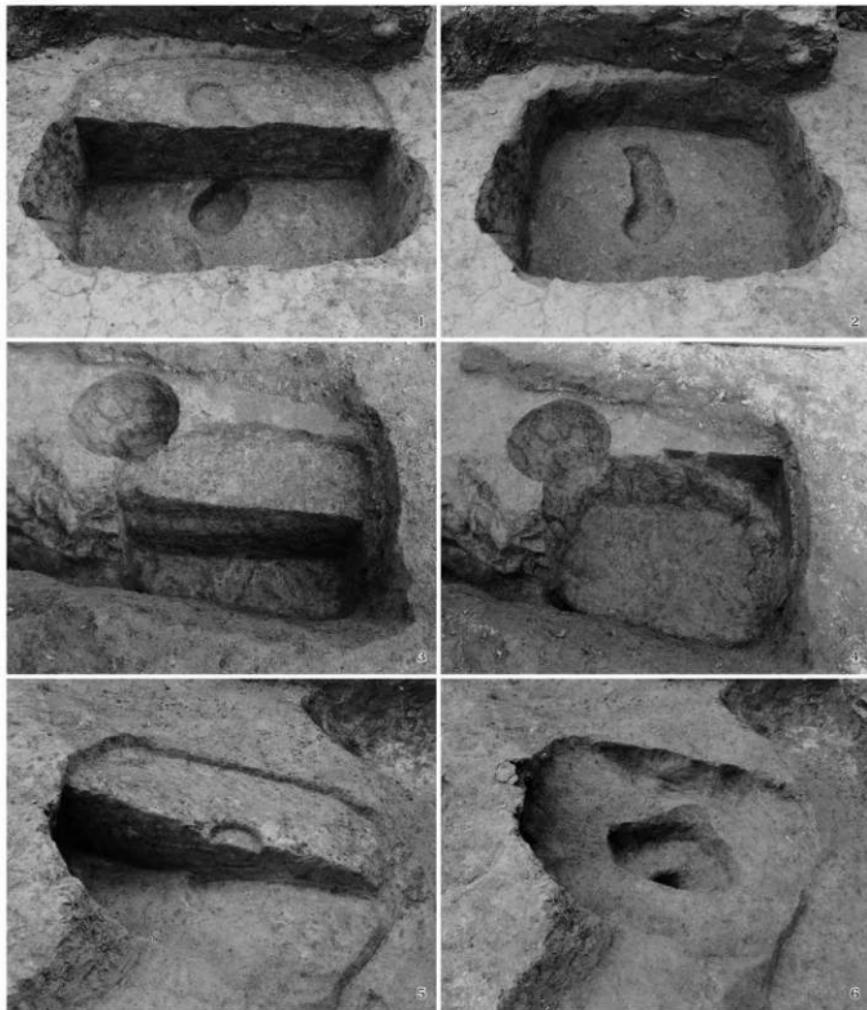
1 SD 005(南東から)
2 SD 005(北西から)
3 SD 005(南東から)
4 SD 005(北西から)
5 SD 005 土層(北西から)
6 SK 014(北西から)



1 柱穴 002 土層(西から) 2 柱穴 002 完盤(西から)
3 柱穴 003 土層(西から) 4 柱穴 003 完盤(西から)
5 柱穴 004 土層(北から) 6 柱穴 004 完盤(北から)



1 柱穴 005 上層 (南から) 2 柱穴 005 完掘 (南から)
3 柱穴 006 上層 (南から) 4 柱穴 006 完掘 (南から)
5 柱穴 007 上層 (南から) 6 柱穴 007 完掘 (南から)



1 柱穴 008 土層（南から） 2 柱穴 008 完盤（南から）
3 柱穴 009 土層（南から） 4 柱穴 009 完盤（西から）
5 柱穴 010 土層（北から） 6 柱穴 010 完盤（北から）

第 237 次 調查

-例　言-

- 本書は福岡市教育委員会が、平成22年度に実施した有田遺跡群第237次調査の報告である。調査は佐藤一郎が担当した。
- 本章の執筆、図面の作成等は佐藤がおこなった。
- 本書に関わる資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

遺跡調査番号	1032	遺跡略号	ART237
地　　番	早良区有田1丁目20番1	分布地図記号	82原
開　発　面　積	500.00m ²	調査対象面積	500.00m ²
調　査　期　間	2010.12.15～2010.12.28		

IV. 第237次調査

1.はじめに

(1) 調査にいたる経緯

平成22年11月17日、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に対し土地所有者から福岡市早良区有田1丁目20-1について埋蔵文化財事前審査依頼（受付番号22-2-816）があった。対象地は以前に周辺道路より1m以上高い畝地を切り下げる駐車場を建設する計画で、事前審査依頼（受付番号18-2-514）を受け、平成18年9月28日の試掘調査で遺構が確認されている。

依頼を受けて、土地所有者と埋蔵文化財第1課は協議を行なった。今回の計画も駐車場建設で、切り下げは申請地の全面から勾配を付けた進入路のみと変更となり、調査対象も4.5m×5.0mの22.5m²に絞り込まれた。

(2) 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査主体 福岡市教育委員会

発掘調査（平成22年度）

事前審査 埋蔵文化財第1課 課長 濱石哲也

係長 宮井善朗

主任文化財主事 加藤良彦

事前審査係 木下博文

総括 埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫

調査第1係長 米倉秀紀

庶務 埋蔵文化財第1課 管理係 井上幸江

担当 埋蔵文化財第2課 調査第1係 佐藤一郎（主任文化財主事）

なお、試掘調査は平成18年に埋蔵文化財第1課事前審査係文化財主事 上角智希が行った。

資料整理（平成23年度）

総括 埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫

調査第1係長 米倉秀紀

庶務 埋蔵文化財第1課 管理係 井上幸江

担当 埋蔵文化財第2課 調査第1係 佐藤一郎（主任文化財主事）

2. 位置と環境

対象地は有田遺跡の中央部に位置し、第28次調査が西側隣接地、第66次調査が本調査地の東隣接地で行われている。第28次調査では、弥生時代前期のV字溝、中世の溝、道路跡などが検出されている（註1）。第66次調査では、古墳時代の溝・柵列・住居跡・掘立柱建物跡、奈良時代の掘立柱建物・井戸など多数の遺構が検出されている（註2）。

註1 福岡市教育委員会「有田・小田部第2集」福岡市文化財調査報告書第81集 1982

註2 福岡市教育委員会「有田・小田部第6集」福岡市文化財調査報告書第113集 1985

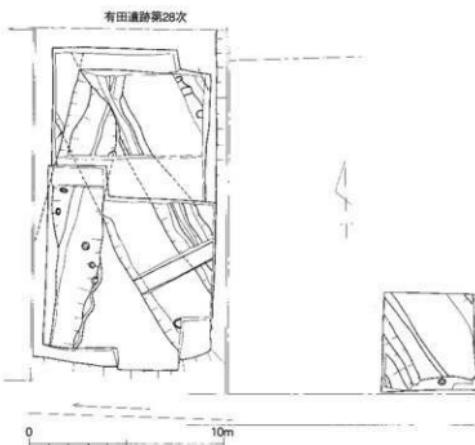


図18 有田遺跡第28・237次調査位置図 (1/250)

3. 調査の記録

(1) 発掘調査の経過

調査は駐車場進入路として切り下げられる部分を対象とし、平成22年12月15日に表土剥ぎ、16日から作業員を入れ遺構検出を開始した。耕作土直下で地山のローム層を確認したが、50年ほど前の土取りのために大きく削平を受け、近年の畑作による耕作痕が所々に入っていた。溝の肩部を検出、写真撮影・実測の後、12月28日に埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。調査実施面積22.5m²。

(2) 検出遺構と出土遺物

溝SD01調査区の南西で、溝の一部、上端部分で延長4m検出した。第28次調査で検出された溝の延長で、肩部のみの検出である。方位はN-60°-Wに取る。上端の標高は12.5m前後を測り、調査区内では深さ1.2m、標高11.3mまでの掘下げ、上層の堆積状況の確認に留まった。溝の埋土からは中世の土器口縁部片他数片が出土したのみである（図20）。

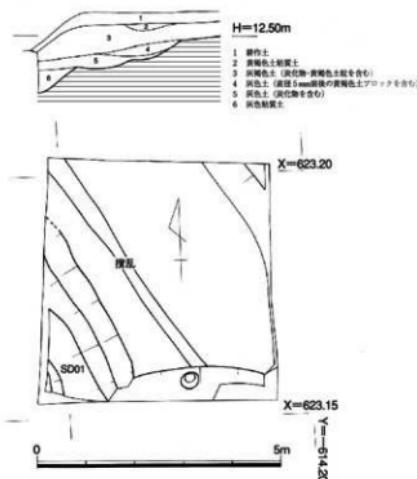


図 19 有田遺跡第 237 次西壁土層図・調査遺構配置図 (1/100)

土師質土器 すり鉢 (1) 口縁端部は外傾し、丸く仕上げられている。全体的に器表の磨滅が著しいが、外面はナデ調整とみられ、内面は横方向のハケ目調整の後条線を 4 本以上施す。胎土には粗い砂粒を含み、焼成はややあまく、にぶい黄橙色 (10YR 7/4) を呈する。

瓦質土器 脇 (2) 口縁端部を内上方につまみ出す。外面がナデ、内面は横方向のハケ目を施す。胎土には砂粒を含み、褐灰色 (10YR 5/1) を呈する。



図 20 有田遺跡第 237 次調査出土遺物実測図 (1/3)

4. 小結

今回の調査地は台地の最高所近くに位置し、今までの周辺の調査成果から弥生時代前期～中世の遺構が数多く存在することが予想されたが、後世の削平により中世の溝の一部を検出するにとどまった。表土中からは弥生土器や中近世の遺物小片が出土しており、土取り以前は隣接地の調査成果にみられるように、遺構が密に存在していたようである。



有田 237 次調査全景（東から）



有田 237 次調査土層（東から）

報告書抄録

ふりがな	ありた・こたべ
書名	有田・小田部50
副書名	第236・237・239次調査の報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1135集
編著者名	藏富士 寛 佐藤 一郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667
発行年月日	2012年(平成24年)3月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あたりせきぐん 有田遺跡群 だい236じょううき 第236次調査	ふくおかけんふくおかしわら 福岡県福岡市早良 くあたり ちょうめ ばん 区有田2丁目14番 10・34・35	40130	0309	33° 33' 44"	130° 20' 6"	2010.11.25 5 2010.12.28	113.0m ²	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
有田遺跡 第236次調査	集落	古代		掘立柱建物				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
あたりせきぐん 有田遺跡群 だい239じょううき 第239次調査	ふくおかけんふくおかしわら 福岡県福岡市早良 くあたり ちょうめ ばん 区有田2丁目14番 36	40130	0309	33° 33' 44"	130° 20' 6"	2011.10.20.1 5 2011.10.31	95.0m ²	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
有田遺跡 第239次調査	集落	弥生 古代		貯蔵穴・溝 掘立柱建物		弥生土器・石器 須恵器		
要約	第236・239次調査における最大の成果は、都庁建築の南端を押さえることができたことである。第189次調査地点から続く、都庁建築南北長舎は、梁行2間・桁行21間で、桁行の長さは42.6~43.0mを測る。都庁南側では、S B002-003を確認できた。S B002は梁行2間・桁行3間に想定できようか。S B002の東側へと続くS B003は2間分の間があり、これらが「長舎」となるのかは不明である。S B003は残念ながら、柱穴1を確認したのみであり、門付近の構造については明らかにすることはできなかった。							

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あたりせきぐん 有田遺跡群 だい237じょううき 第237次調査	ふくおかけんふくおかしわら 福岡県福岡市早良 くあたり ちょうめ ばん 区有田1丁目20番 1	40130	0309	33° 33' 51"	130° 29' 9"	2010.12.15 5 2010.12.28	22.5m ²	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
有田遺跡	集落	中世		溝		土師質土器 瓦質土器		
要約	中世の溝の肩部を検出した。第28次調査で検出された溝の延長部とみられる。							

あり た こ た べ
有田・小田部 50

—第236・237・239次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1135集

2012(平成24)年3月16日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092)711-4667

印刷 株式会社月成印刷
福岡市博多区大井2-13-27
(092)611-3600
